

職業レディネス・テスト

キャリア教育における アセスメント・ツールの活用

秋田県大館市立第一中学校教頭 小笠原茂人

1 本校のキャリア教育

本校では平成18年度から「もって生まれたものを深く探って強く引き出す生徒の育成」を教育目標に掲げ、キャリア教育の趣旨を全教育活動に敷衍させ取り組んできました。キャリア教育

推進の柱として「体験」「表現」「情報」「検査」の4つを据えています。アセスメント・ツールは主として「情報」と「検査」に関係しますが、本校のキャリア教育の全体像をつかむために、「体験」と「表現」について述べておきたいと思います。

学年創作発表、12月の個人結晶レポートという一連の調査活動や表現活動の中で深められ、体験の省察によりキャリア発達を促そうとしています。

2 「情報」と「検査」における アセスメント・ツールの活用

職業理解や自己理解のために「職業レディネス・テスト」(以下「VRT」)や「キャリア・インサイト」や「OH BYカード」を使用しています。

(1) アセスメント・ツール利用の経緯

平成18〜20年度の取り組みで「体験」と「表現」を中心としたキャリア教育の考え方が職員の間になじり浸透したことを受け、21年度から本格的に職業理解のための情報ツールや自己理解のための検査ツールを導入することしました。学区内にある秋田職業能力開発短期大学校(以下「職能短大」)の職員の方々を講師としてキャリア・インサイトの教員研修及び生徒へのガイダンスを実施しました。職能短大からは、労働政策研究・研修機構(以下「JILPT」)の研究刊行物を紹介してもらいましたが、その中でVRTの分化度や「進路成熟尺度」(日本進路指導協会、1999)や「進路課題自信

尺度」(坂柳・清水、1990)によって職業意識の発達や自己肯定感の向上をとらえる手がかりを得ました。JILPTを2度訪問し、それらのツールについて理解を深める中で、更にOH BYカードの存在も知りました。平成21年度に秋田県教育委員会が新規事業として起した「チェンジあきた教育プロジェクト事業」に「自立心と進取の気概を育むキャリア教育」をテーマに掲げて応募し認められたことにより、「体験」「表現」「情報」「検査」を一体的かつダイナミックに展開する中で、アセスメント・ツールを本格的に活用したキャリア教育を推進することができるようになりました。

(2) 各種ツールの活用

① キャリア・インサイト*

3年生に進級する前後(3月〜4月)に活用。職業興味調査等から入り具体的な職業についてテキスト情報を得ます。これは、5月の修学旅行における東京での1日職場体験学習先の下調べにもなっています。ガイダンスは職能短大で行い、その後のキャリア・インサイトの使用は総合的な学習の時間に本校のコンピュータ室で行いました。



「体験」と「表現」はセットです。「キャリア教育の基底」という本校独自の考え方に基つき、将来どのような道に進もうとも中学校時代に5つの体験(役割・協力体験、探求・創造体験、勤労・交流体験、表現体験、達成・感動体験)をしっかりと積んでおくことが、実社会をたくましく生きていくうえで自分の支えになると考えています。年間の主要な学校行事はこれら5つの体験を積み重ねます。中でも各学年が5月に行う職場体験学習は6月のグループレポート発表会、9月の学校祭の

*編集部注：キャリア・インサイトは、大学生向けに開発されており、中学生に使用した場合の結果についての信頼性は保証されていませんが、そのことを理解し、先生の指導の下で使用することが望まれます。



② VRT

3年生全員(約170名)を対象に、職場体験学習前の5月、職場体験をグループレポートにまとめた後の7月、職業興味等について個人研究レポートを作成した後の12月にVRTを実施しました。判定等は雇用問題研究会に依頼。結果票を学級活動の時間でワークシートに転記。基礎的志向

③ キャリアマトリックス

性について着目するとともに、適性があると思われる職業群に関心が深まるようになりました。また、3回の分化度の変化も見ようとなりました。

②で明らかになった職業群で示された具体的な仕事内容について、興味や疑問を持ったものをキャリアマトリックスを活用して調べる学習活動を行いました。(写真)

④ OHBYカード

11月にJ-LPTの職員を講師に招きOHBYカードの校内研修会を開きました。上記の①～③は個人学習の形態が中心となりますが、OHBYカードの場合は、個人学習とグループ学習の両方をおりまぜながら活気ある授業が期待できます。実際、12月にOHBYカードを用いて校内授業研究会を行った折には、カードの絵柄を見てその仕事を「選択する」「考え中」「選択しない」に分けていくときの一人ひとりの集中

●VRTのA検査とC検査の各回の分化度の平均値

職業志向性	H21.5	H21.7	H21.12
A検査 興味	11.44	10.99	11.56
C検査 自信	11.3	10.36	11.27

●進路課題自信尺度の推移

自信尺度	H21.5	H21.7	H21.12
教育的進路課題	9.1	10.5	11.1
職業的進路課題	9.1	10.4	11.0
人生的進路課題	9.9	10.6	10.9

(3) 各種ツールを活用した効果

してカードを選ぶ姿や、互いの選んだカードについてグループ内で自由闊達に話し合う姿が見られ、手応えを感じました。

① VRTにおける職業興味の分化度(6領域(RIASEC))のうち最も得点の高いものと低いものの差の向上

・全体として他の調査より高い数値

・職業興味がいかに明確化

② 進路課題自信尺度*による自信度の低いグループの向上

・各項目について自信度が向上

(4) 生徒の声

・職場体験や個人研究が効果的に影響

●「もともと興味のあった芸術分野についてVRTの興味の標準得点の数値が100に近く、ますますやる気が出てきた。自分の好きなことを職業にしたいと強く思った。」

●「今からあまり限定しないで」と説明があったので、広い視野をもっているいろいろな職業に目を向け、それぞれの職業の良さや楽しさを見つけていけたらいいと思う。」

3 今後へ向けて

自分自身の在り方や生き方を働くことと関係つけて考えるキャリア教育を全教育活動で展開していくうえで、アセスメント・ツールは生徒にとっても指導する側にとっても、充実した学習活動を提供するとともに実践の手応えを評価できる有効なものです。活用や検査そのものが目的化しないように、広角的・重層的・継続的な取り組みを通じて、子どもたちが自己理解を深め、自立心や自己肯定感が向上するように努めたいと思います。

*進路課題自信尺度:中学生くらいの若者の進路選択に対する自信を「教育的」「職業的」「人生的」の3側面の各4項目で測定。1項目ごとに「自信がある:5点」～「自信がない:1点」まで5段階で評価。数値が高いほど自信度が高くなる。

6つの職業領域（現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的）への興味・自信と3方向の日常行動特性（対情報、対人、対物）から、職業興味、基礎的志向性と職務遂行に関する自信度の特徴を知ることができる。

■適用対象：中学2年生以上の生徒・学生

職業レディネス・テスト

VRT

Vocational Readiness Test

VRT の 特 徴

職業レディネス・テストの「レディネス」とは、「準備（用意）ができていること」という意味です。このテストが主に対象とする中学生、高校生の職業的発達における準備の程度を示す概念であり、VRTでは、「職業に対する興味の傾向」「職業に対する自信の傾向」「日常生活に対する興味の傾向」を3つの検査からとらえます。

職業経験の少ない若年層を対象としているため、単に職業興味の特徴だけをとらえて職業とのマッチングを行うものではありません。職業興味の発達という観点から、また、興味と自信との関係などから総合的に個人の特徴をとらえようとする意図を含んでいることから、「職業レディネスを測るための検査」とも言えます。

個別でも集団でも実施可能で、実施時間は自己採点を含めて約40分程度、「結果の見方生かし方」を活用したワークが約40分程度と、中学校、高等学校の授業で活用できるようになっています。

発達段階 に応じた 活用法

職業知識の乏しい中学生でもイメージが持ちやすいように、VPRのように職業名ではなく、「仕事の内容やどんなことをするのか」といった設問（54問・A、C検査）と、「日常生活の行動特徴」に対する設問（64問・B検査）で構成されています。

このように、身近な内容で職業について意識し、考えながら、興味や可能性を広げることを前提にワークシートを活用して結果の解釈を進めていくようになっています。

ワークシート の 活用法

「結果の見方生かし方」（ワークシート）では、単に結果と職業の照合を行うのではなく、職業の世界をイメージできるように6つの職業領域（ホルランドの6類型）で表すことにより、

職業理解へとつながるよう工夫されています。

中学生や高校生では、職業に対する知識がまだまだ希薄であり、社会にどんな職業があるのかを知らず、進路選択への関心や意欲を高めるため、この時期の職業興味は、様々な経験や活動によって大きく変化していく可能性を秘めています。結果を固定的に解釈せず、将来を見据えたときにどのような段階にあるかという視点を重視します。

● VRTの構成

- A検査 職業興味（6領域についての興味）
- C検査 職務遂行の自信度（6領域についての自信）
- B検査 基礎的志向性（日常生活における志向性：対情報、対人、対物）

● 6つの職業領域（J.L.ホルランドの6類型）

R：現実的職業領域	機械や物体を対象とする具体的で実際の仕事や活動の領域
I：研究的職業領域	研究や調査のような研究的、探索的な仕事や活動の領域
A：芸術的職業領域	音楽、美術、文学等を対象とするような仕事や活動の領域
S：社会的職業領域	人と接したり、人に奉仕したりするような仕事や活動の領域
E：企業的職業領域	企画・立案したり、組織の運営や経営等の仕事や活動の領域
C：慣習的職業領域	定まった方式や規則、習慣を重視したり、それに従って行うような仕事や活動の領域

VRT で できること

この検査の特色を要約すると、
① 生徒が職業に関する自分のイメージをチェックしたり、進路選択への関心を高めることが期待できる。

② A検査では、職業興味を測定することにより、具体的な職業場面における自己の興味を理解できるようになっている。

③ B検査では、職業興味を明白に表明できない生徒に対しても、日常の生活行動・意識についての質問を通して、興味の方向を引き出すことができる。

④ C検査では、職業・仕事に対する自信の程度を測定し、職務遂行の自信度という観点から自己の職業観を理解できるようになっている。

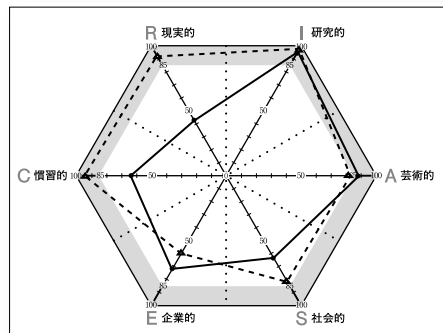
次頁の社会人の方による検査事例では、「自分の好きなことをやっているという気持ちがあるの」で、前向きに仕事に取り組んでいると思います」という感想が、興味の強い職業領域と自信がある職業領域が一致している結果によく表れています。

システムエンジニア

職業レディネス・テスト

●社会人にVRTを受けていただきました

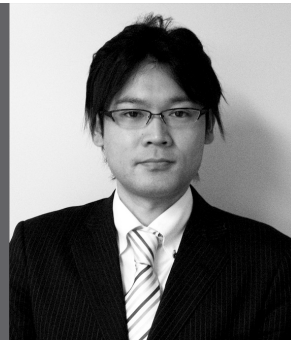
■興味(A検査)と自信(C検査)の六角形



—— 興味
- - - 自信度

(株)サンビプロダクトセンター
クロスメディア部 担当リーダー
山口雅広さん (29歳)

大学で電気電子工学を専攻。卒業後、(株)サンビプロダクトセンターに入社、印刷物のDTPによる電子組版や情報処理等のプログラム、システム開発に携わる。現在7年目。



基礎的志向性のプロフィール			
基礎的志向性	標準得点	0 10 20 30 40 50 60 70 80 85 90 100	弱い——基礎的志向性——強い パーセンタイル順位
D 対情報志向	99		
P 対人志向	89		
T 対物志向	99		

山口さんの
職業レディネス
判定

●興味が強い職業領域

- 1位: I 研究的職業領域
- 2位: A 芸術的職業領域
- 3位: E 企業的職業領域

●自信がある職業領域

- 1位: I 研究的職業領域
- 2位: C 慣習的職業領域
- 3位: R 現実的職業領域

興味が高いのは、研究や調査などのような活動をするIの研究的職業領域(例:研究者、学者)と音楽、美術、文芸など芸術的な活動をするAの芸術的職業領域(例:ミュージシャン、デザイナー)。

自信の傾向は全体として高いが、組織を動かすような活動である企業的職業領域が若干低く出ている。基礎的志向性はD(対情報志向)、P(対人志向)、T(対物志向)ともすべて強い。

もともと数学や理科などの科目が好きだった山口さんは、大学も理系に進学。卒業時は就職氷河期だったが、幅広く就活を行い、比較的早期に内定が決まったという。「自分の好きな種類の仕事ができそうな会社をいろいろと受けましたが、この会社は情報処理だけでなく美的要素も関係するということで、私のやりたい分野に合っていると思いました」

山口さんは小学校時代、担任教師から「きみはパソコンで絵を描くような仕事が向いているのでは」と言われたことを覚えている。またパソコンがそれほど一般に広まっていなかった時代だが、パソコン(「情報処理」)＋絵画(「美的センス」というのは、今考えると自分の好きな分野を端的に表していたと感じるという。会社選択にあたって山口さんの方向性を決めたのは、情報処理と書物やアートなどへの興味だったようだ。

職業レディネス・テストの結果を見てもそれは顕著に表れている。山口さんの興味が高い職業領域として、研究的領域(I)と芸術的領域(A)の得点が特に高い。I領域に近いA領域の職業としては、

「でも、自分の好きなことをやっているという気持ちがあるので、前向きに仕事に取り組んでいると思います」

今後は、よりグローバルな視点で、多様なプログラム言語を使った効率的で魅力的な情報の発信に寄与するシステム開発を図ってきたいと語る。

氷河期の再来とも言われる昨今の厳しい状況の中で就職活動をする人たちに、山口さんは「後悔しないために、まず行動することです。職業選択・企業選択には人それぞれ基準があると思いますが、やはり自分の好きなこと、やりたい仕事かどうかを基準にしたほうがよいのではないだろうか」とアドバイスしてくれた。

現在の仕事は、自動組版システム構築やデータ処理のためのプログラムミングなど。顧客からの様々な要求に対応しなくてはならず、常に失敗への不安もつきまとい、ストレスはかなりあるという。

「結果でした」。